

「1-1 防災教育に対する知識構造的アプローチ」

東京大学情報学環 総合防災情報研究センター
センター長 田中 淳

Sub-groupの全体計画

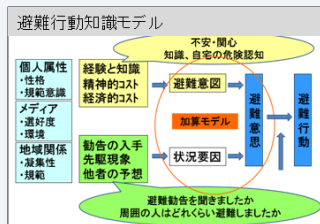
地域類型化; a)各種統計分析／就業構造、社会移動等
b)社会調査法／意識や知識構造の把握

先進地域分析; a)地域行政課題と知識体系の整理
b)防災リテラシー向上手法の予備的解明。

地域類型毎の防災リテラシー向上手法の提供
H25; 訪問面接調査
web調査

地
域
研
究
会

地域類型B



知識構造の解明



地域類型C



地域類型D

	防災行政課題		
	耐震化の推進	被害想定	...
地震学	長周期地震動予測	断層モデルの解明	
地盤工学	微視的地盤構造	液状化予測手法	
建築学	耐震手法の評価	被構造部材の挙動	
...			
医学		災害医療高度化	
...			
社会学			
心理学		避難行動予測	
...			

地域行政課題マップ

提供

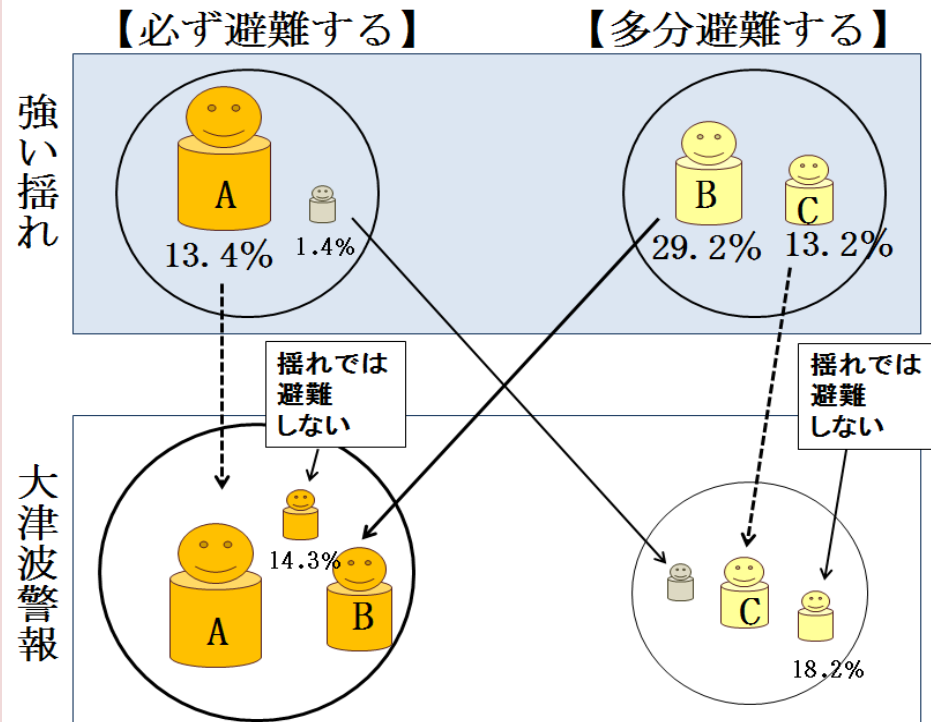
永続的実践的共同体構築手法への転換と高度化

結果1: 誰に

RQ1. どのような層に分かれているのか？

①避難意図での層化

- 揺れで避難する層 = 15%
- 警報付加で避難する層 = 44%
- 警報付加でも迷う層 = 31%
- 避難意向の低い層 = 10%



②避難阻害要因での層化

- 自身が避難困難 = 30%
- 家族に避難困難 = 51%
- 家の倒壊 = 47%
- 避難路の閉塞 = 40%
- 避難する場所 = 24%

③HMを見たことがない = 40%
現物を見た人は29%

④危険地区指定の有無
わからない人 = 48%

配布だけでは効果は低い。

結果2:何を

RQ2. どのような内容を伝えるべきか？

①知識面の課題

- a. 引き波神話 = 84%
- b. 揺れ神話 = 81%

②多くの信念は妥当

- a. 第一波から逃れられれば、安心できる = 20%
- b. 大きな揺れに襲われたら、何が何でもすぐに高台に避難すべきだ = 58%
- c. 避難は何時間も続くので、遠くてもより安全で過ごしやすい場所まで避難すべき = 72%
- d. 防潮堤や防波堤が整備されたので、今では少々の津波は心配ない = 18%

②車避難

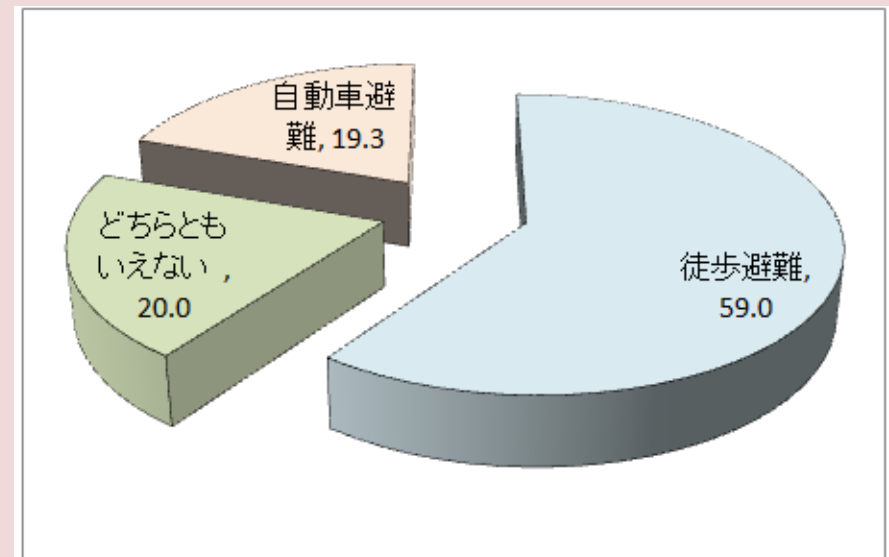
- a. 徒歩避難 = 59%

b. 車避難の選択理由

「早く遠くまで避難可能」= 51%

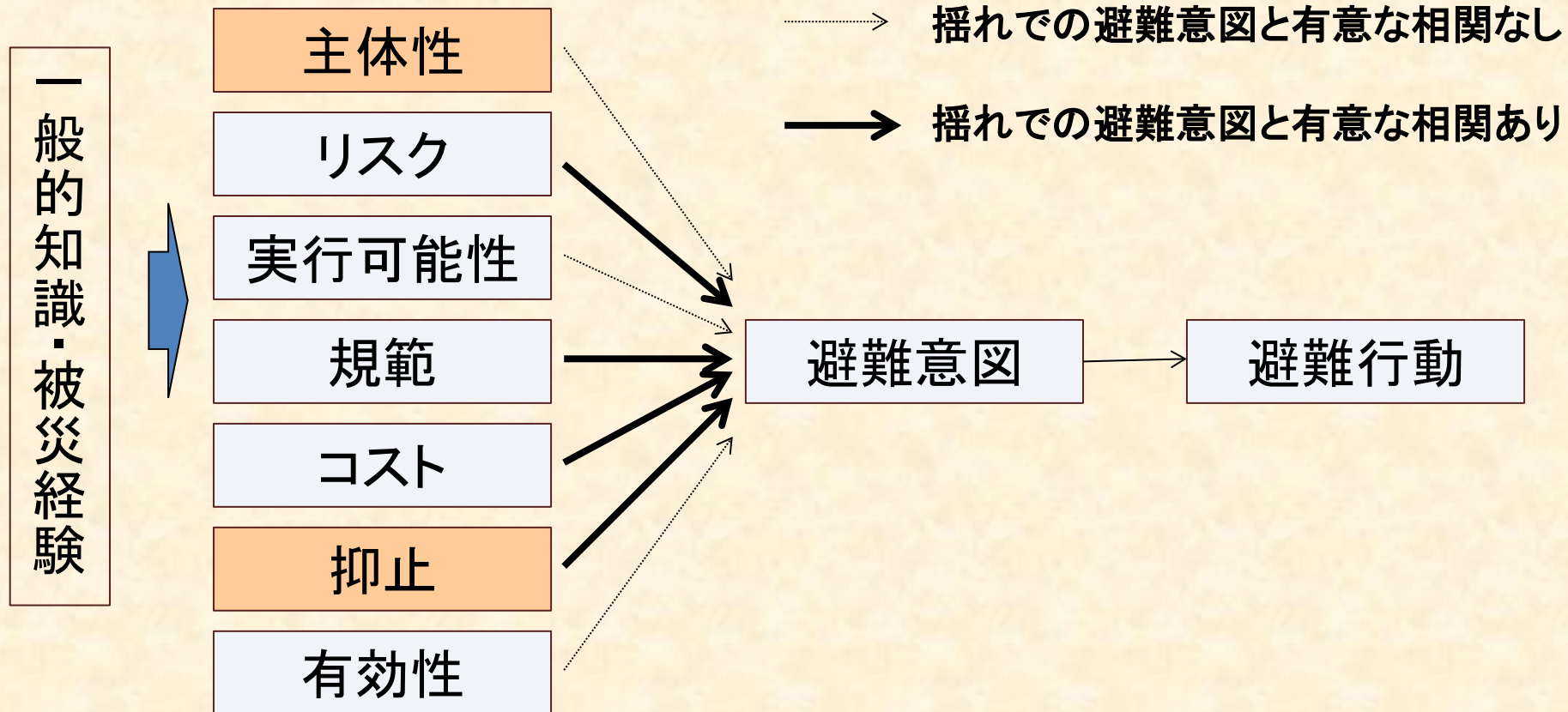
「家族で避難する」= 49%

「道路状態が整備されていれば」
= 48%



結果2:何を

RQ2. どのような内容を伝えるべきか？



- ・「自己責任」よりも自ら避難を決めるべき。
- ・「抑止」と名付けたが、解釈は難しい。
- ・関連調査の結果と一貫性が認められない。

結果3:どのようにアプローチするか

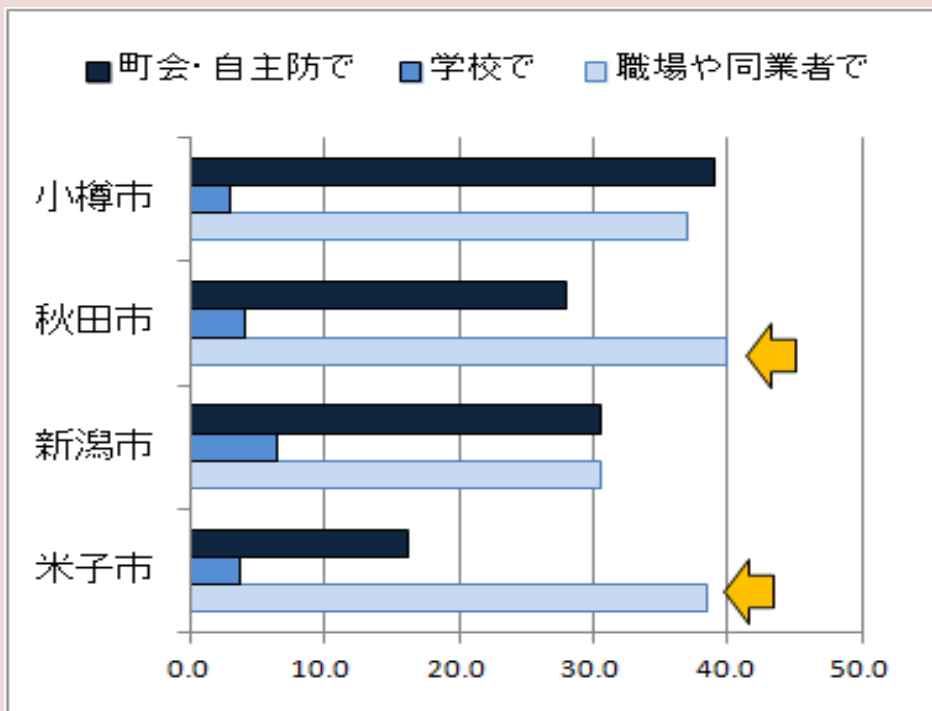
RQ3. 働きかける経路は？

①津波の可能性やとるべき行動等を話題にした機会

職場が、自主防を上回る地域も

a. 秋田市; 40% > 28%

b. 米子市; 38% > 16%



②地域行事への参加

a. ほぼ4分の1ずつ

b. 秋田市; 良く参加 = 30%

c. 小樽市; = 22%

d. 新潟市; = 17%

e. 米子市; = 18%

